

氏名(本籍地)	清水 みち (神奈川県)		
学位の種類	博士(文学)		
学位記番号	博乙第72号		
学位授与年月日	平成25年3月16日		
学位授与の要件	昭和女子大学学位規則第5条第2項該当		
論文題目	意匠と小説：Virginia Woolf の手法の発展 － <i>To the Lighthouse</i> を中心に		
論文審査委員	(主査)	昭和女子大学教授	平井 法
	(副査)	昭和女子大学特任教授	島田 太郎
		昭和女子大学特任教授	渡邊 利雄
		中央大学名誉教授	深澤 俊

## 論文審査結果の要旨

Virginia Woolf への論究は、1960年代までの「意識の流れ」論から、1970年代以降のフェミニズム批評に至るまで、夥しい数となって発表されている。最近のフェミニズム批評が定型化して新鮮味が乏しくなり、新しい視点を見いだせずにいる現状で、Virginia Woolf を論じるのは容易ではない。この状況の中で、Erich Auerbach をして「こまごました些細な出来事を通して、何という現実の深みが究められていることであろうか！」(Mimesis, 1946) と感嘆させた Woolf の「些細な出来事」を、いわば落ち穂拾いのようにして取り上げ、そこから Woolf の創作方法を究めていったのが、本論文、清水みち『意匠と小説：Virginia Woolf の手法の発展－*To the Lighthouse* を中心に』である。論者は一家の主婦が行う「編む」という行為、幼い子どもがカタログの絵を「切り抜く」という行為、この些細なイメージが作品を通して、現代の人間関係や、普遍的な内的感情の表現にまで高められていることを論じている。

*To the Lighthouse* は Woolf の少女時代の追憶を原型にしており、典型的フェミニズム批評では、Woolf の父は「家父長」的抑圧者であり、虐げられた娘としての Woolf の視点で論じられたりしたが、実際の Woolf は父の死に際して精神に異常をきたすほどの衝撃を受けるなど、繋がりをもっていた。この実像の Woolf に戻って彼女の創作の秘密を紐解くには、些細なイメージの拾い集めという地道な手続きによるしか、方法はない。今までは、虚勢を張ってでも世間に訴えた面から Woolf を論じ、その方が説得性のある Woolf 像を作りあげてもきたのだが、この清水論文はこの Woolf 像から漏れ落ちてしまった、Woolf の本質を論証することになった。その意味で本論文は、女性らしい視点からの新しい Woolf 論として価値のあるものである。

本論文の審査は平成 24 年 12 月 19 日(学園本部館第 3 応接室)、平成 25 年 1 月 9 日(学園本部館第 2 会議室)の二度にわたって行われ、その後、平成 25 年 2 月 2 日の公開審査(研究館 7L04)による手続きを経た。その結果、本論文は先行研究を補完するだけの十分な価値を有するものと認められ、審査委員会としては委員全員の意見の一致を見て、本論文を本学文学博士号授与に相当する論文と判定した。以上、報告する。